

令和6年12月12日

福生市議会議長 武藤政義 様

総務文教委員会委員長 仲間正司

令和6年度 福生市議会総務文教委員会視察報告書

本委員会は、令和6年度行政視察を次のとおり実施いたしましたので、報告いたします。

1 視察日程

令和6年11月6日(水)～11月7日(木)

2 視察先及び調査事項

(1) 静岡県焼津市

部活動地域移行について

(2) 静岡県静岡市

安東小学校について

3 視察参加者

仲間 正司(委員長)

市毛 雅大(副委員長)

山崎 貴裕

武藤 政義

原田 剛

石川 義郎(欠席)

市川 佳樹(欠席)

二見 貴裕(議会事務局)

〔調査事項〕

部活動の地域以降について

市の概要(2024年10月31日 現在)

- (1)面積 70.3km²
- (2)人口 135,444人
- (3)概要

焼津市は静岡県中部の志太平洋野の東端に位置します。東は駿河湾に面し、北は高草山、満観峰、日本坂峠、観峰、花沢山などの山々(高草山山地)で市域を分かち、南は大井川が市境となっています。また、西は藤枝市につながり、市域は70.3km²、東西に狭く南北に長く、海岸線は15.5kmにわたります。人口は約13.5万人、北は旧街道が通る日本坂峠を含む高草山山地によって静岡市と接し、地勢的に明確に分かれています。古代から峠越しに旧街道でつながり、交流は続いてきました。西は同じ志太平洋野で藤枝市、島田市に接続し、南は大井川を隔て吉田町と接します。志太平洋野は大井川流域の文化圏として人的交流も盛んで、歴史文化に多くの共通点が認められます。大井川上流の川根本町などとも木材の流通などを通して、歴史的なつながりがあり、また大井川は天正の瀬替え(1590年)以前は本流を和田浜付近としていました。古来より駿河・遠江国の境は大井川とされていたため、瀬替え以降も大井川地区は周辺を含めて遠州分とされており、大井川越しに接する吉田町以西の歴史文化とも関係を持っています。

取り組みの経緯と概要

近年、部活動における教員の負担増加や、生徒たちの多様な学びの場を提供する必要性が議論されこうした中で、文部科学省は部活動の地域移行を推進しており、全国的な課題として取り組みが進んでおります。焼津市もこの流れを受け、部活動を地域に移行する取り組みを段階的に進めて、焼津市が取り組む地域移行は、単に学校外へ部活動の場を移すだけでなく、地域と学校が一体となって子どもたちを支える仕組みづくりを目指した取り組みをしています。

焼津市の令和6年度中学生の生徒数

平成25年度 3,853人⇒令和6年度 3,379人

10年で約500人減



部活動地域移行の背景

焼津市の部活動地域移行は、いくつかの課題に対応するために進められており一つ目の課題は、教員の長時間労働です。これまでの部活動は、教員が指導を担うことが一般的でした。しかし、授業準備や校務に加えて休日の部活動指導を行うことで、多くの教員が過重労働に直面している、この状況は教員の心身の健康や働きがいに影響を与えるとともに、生徒への教育の質にも悪影響を及ぼす可能性がある。

二つ目の課題は、生徒の多様なニーズに対応する必要性です。従来の部活動では、学校単位で限られた選択肢の中から活動を選ばざるを得ないケースが多く、必ずしもすべての生徒が自分の興味や関心に合った活動を行えるわけではありませんでした。特に、スポーツや文化活動だけでなく、趣味や新しい分野に挑戦したいという生徒の声も増えており、部活動の在り方が見直される時期に来ている。

焼津市の具体的な取り組み

焼津市は、令和4年度から地域クラブ活動を導入し、この取り組みは、休日の部活動を地域主導のクラブ活動へと移行することで、教員の負担軽減と生徒の選択肢拡大

を図るもので、令和4年度にはまず5種目で開始され、令和5年度には12種目、令和6年度には17種目へと対象を拡大する予定で、これにより、焼津市の中学生は学校に関係なく地域のクラブ活動に参加できるようになった。

活動内容は非常に多彩で、柔道、剣道、相撲といった伝統的な武道から、トランポリン、eスポーツ、やいづよさこい、フラダンスなど現代的な種目まで含まれています。これにより、生徒たちは従来の学校内部活動だけでは得られなかった新たな経験を求める機会を得ることができ、地元の特徴を活かした「海洋体験」など、地域資源を活用した活動も行われており、焼津市ならではの取り組みが進んでおりさらには、令和6年度以降には、野球やサッカー、バスケットボール、などの団体競技も地域クラブ活動として展開される予定で、これにより多くの生徒が自分の興味関心に合った活動を見つけられる環境が整備されてきている。



地域移行の運営体制

部活動を地域クラブ活動へと移行するためには、地域全体での支援体制が不可欠です。焼津市では、地域の指導者やNPO法人、スポーツクラブなどと連携し、持続可能な運営体制を構築し、専門性を持つ指導者の確保や、クラブ設立時の用具購入費用

に対する補助制度を導入するなど、さまざまな形での支援が行われていてクラブ活動の運営には地域住民や保護者の協力も欠かせません。地域住民が指導者として参加することで、生徒たちにとっては学校外の大人と触れ合う貴重な機会が増え地域全体で子どもたちを育てるという意識が醸成され、地域社会そのものの活性化にもつながることが期待されています。一方で、地域移行にはいくつかの課題も存在し、まずクラブ活動を持続可能にするための資金面での課題、クラブ運営には指導者の報酬や施設利用料が必要であり、安定した資金確保が求められます。焼津市では補助金制度の整備を進めていますが、今後も地域全体で資金を支える仕組みづくりが重要視されています。地域移行に伴い、学校間や地域間での活動格差が生まれる可能性も指摘されていて、人口が集中する地域では多様なクラブが運営される一方で、人口が少ない地域では選択肢が限られる可能性があります。こうした格差を解消するためには、市全体で活動を調整し、生徒が平等に活動の機会を得られる仕組みが必要となる焼津市の取り組みは、これらの課題に積極的に取り組みながら、地域全体で子どもたちの成長を支える仕組みづくりを進めて行き、この地域移行が成功すれば、他の自治体にとっての物差しになると考えられます。

所感

説明を受け、課題や問題点も知ることになり、運営費(指導料、一部会場使用料)は受益者負担でまかなうことを基本としており、補助金は1クラブ(テニスなど活動拠点が複数ある場合は1会場ごとに)年間10万円で、使い道も自由ではなく、また生徒から月平均2,000円のいわゆる月謝をもらい活動しているが十分ではないようである。指導員へは、1時間当たり960円から1,100円程度の時給で支払われているとのことで、運営費としては決して満足できる状況ではなく、また指導者も時給がそれほど高くないため、若い現役世代の方は集まらないようで、平均年齢も50歳代でこれにはスポンサー等の援助が必要だと感じるが、行政側としてもそれを期待しているようである。ただ大人の損得に子どもたちが利用されないか心配な面もある。さらに競技性のある種目でも「勝利主義」を求めさせないことを謳っているため、熱量のある指導者の確保も難しいのではないかと感じる。また、生徒の地域クラブへの参加数にも注目すべきであり焼津市内の全9校の中学校の生徒数は令和6年度3,379人で部活動参加生徒数は2,390人(全体の71%)で、その内運動部参加生徒数は1,691人(全体の50%)となっている。この1,691人のなかで、地域クラブへ参加している生徒は400人程度となっていて生徒、保護者の地域クラブへの認知や理解度がまだまだ浸透していないこともあるようだが、部活動は学校教育の一部であるが、地域クラブはいわゆる教育ではないと考えている保護者も多く、参加を控えているケースが多いので

はないか。焼津市の部活動地域移行は、学校教育と地域社会の新たな連携モデルを築くもので、この取り組みを通じて教員の働き方改革を進めるだけでなく、生徒一人ひとりが多様な学びや経験を得られる環境が整備され、地域全体で子どもたちを育てるという理念のもと、この取り組みは今後さらに発展し、地域社会全体の活性化にも寄与する事を視察にて学び、福生市においてもスポーツクラブや文化団体との連携を強化し、学校外で活動を継続できる仕組みを作り、外部指導者を確保するための支援(講習会の実施、報酬制度)を進めて行き、地域によって提供できる活動の種類や質に差が生じない体制を考えて行かなければならないと感じ、福生市が中学生のクラブ活動の地域移行を成功させるためには、地域の多様な団体や住民の協力を得ながら、段階的かつ丁寧に取り組むを進めることが重要で、国や都からの支援を活用しつつ、地域独自のニーズに応じた取り組みを模索していく必要あると感じた。



<静岡県静岡市視察>

【11月7日(木)】

〔調査事項〕

安東小学校について

市の概要(2024年11月12日 現在)

(1)面積 141,193km²

(2)人口 673,730人

(3)概要

静岡市は、3つの区を持つ政令指定都市で、静岡県の県庁所在地で温暖な気候に恵まれ、北部の南アルプスから南部の駿河湾まで、豊かな山と海に恵まれた自然環境で、美しい風景や豊かな食文化を育んできました。今川家や徳川家の城下町として栄えた市の中心部は、商業施設、行政、医療施設などがコンパクトにまとまり、都市機能が充実。産業面では、古くより製造業が盛んであり、「ホビーのまち静岡」といわれるなど、静岡のものづくりは、多くの人に親しまれています。交通網では新幹線、高速道路はもちろん国際貿易港の清水港など世界に開かれた交易を持つ地域です。



取り組みの経緯と概要

安東小学校は昨年「創立 150 年」を迎えました。長い歴史を重ねてきた安東小学校の歩みについてふれてみます。学校創立は明治7年(1874)3月11日、「教育舎」という名称で開校し、明治18年に「賤機尋常小学校」と改称し、1年生から4年生の組ができ明治41年から義務教育の年数変更があり、5年生ができ翌年6年生ができて、現在のような6学年の学校となりました。「安東」という名前が校名に入ったのは、明治22年「安東村立安東小学校」と改称され、昭和22年(1947)に「静岡市立安東小学校」となり現在に至ります。大正13年(1924)9月、現在地(安東三丁目)に校舎を新築移転し、今年で100年を迎え創立当初児童は59名で(当時は4年生で卒業)戦後、現在の名称となった昭和22年には、1518人、昭和36年には安東小史上、最も多い2,111人となりました。昭和39年に竜南小、昭58年に城北小と近隣の小学校が創立され、安東一丁目の学区変更などもあり2,000人を超えることはなくなり、平成になって平成2年(1990)の1014人を最後に、800～900人台で推移していき、令和4年(2022)に782人と昭和11年以来の800人を切り、現在令和6年4月末には、704名となっています。

安東小学校は「一人一人を大切にす授業研究」というテーマで、職員が研修を積み重ねてきおり、この理念は、今でも教育活動の基盤と子どもたち一人一人に目を向け、その子のよさやその子らしさを大切にした、教育を継承している姿勢がみえました。安東小学校は、地域に根ざした教育活動を行い、子どもたちの成長を支える大切な役割を果たし近年、教育の方法は変化し続け、子どもたちが未来に必要な力を育むための取り組みが重要視されており、学力向上だけでなく、社会性や人間性の育成にも力を入れて、その教育活動は多岐にわたり、学習面では、安東小学校は、「個別最適な学び」を大切に、教室内では児童一人一人のペースに合わせて学べるように、少人数指導や習熟度別のグループ学習を積極的に取り入れ、理解が深まるとともに、学びへの興味や意欲も高め、授業では子どもたちは自分のペースで学ぶことで、これらの取り組みは、子どもたちにとって、より実践的で柔軟な学びの場を提供しさらに、地域との連携を大切にして地域の人々と協力して行う学習活動や、地域の特性を活かした授業が行われ、地元の農産物や伝統文化について学ぶ授業や、地域の清掃活動などがその一例で、これにより子どもたちは地域社会の一員としての自覚を育み、社会性を養うことができ地域の高齢者と交流する機会もあり、異世代とのふれあいを通じて、思いやりや感謝の気持ちを育むことができる。

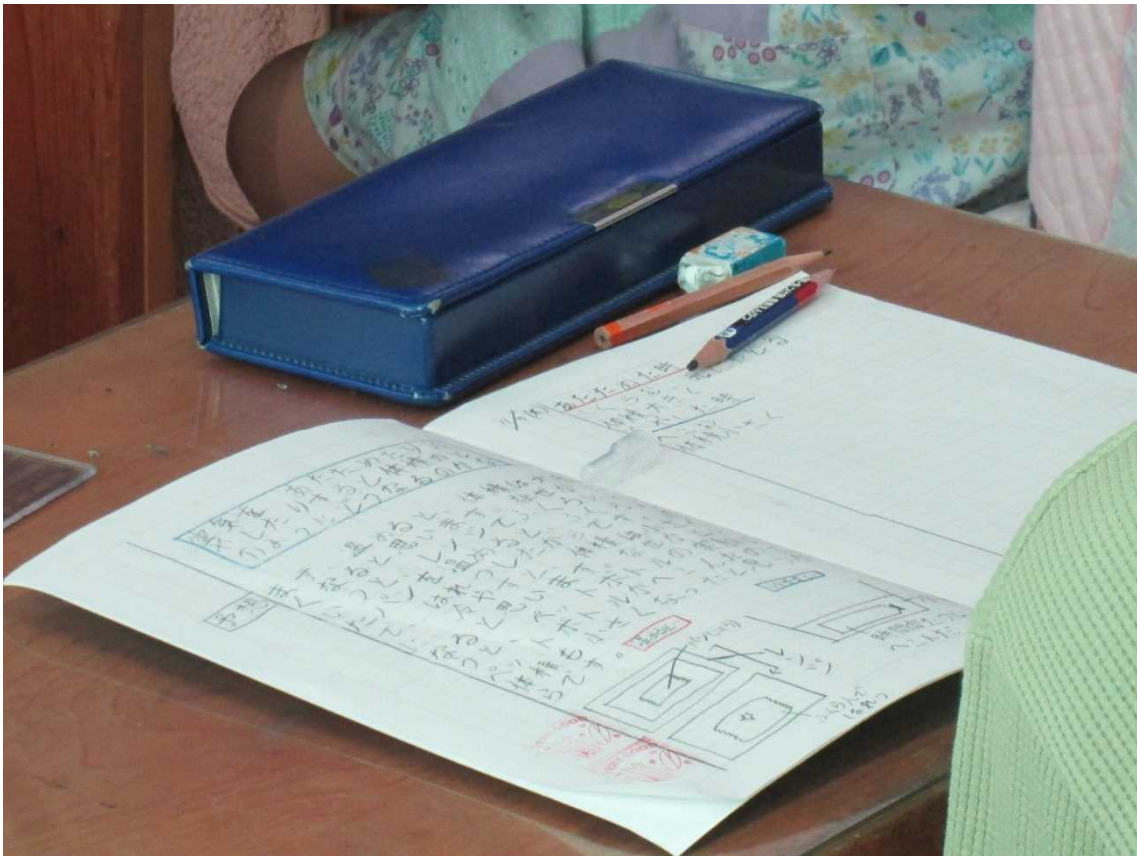


ひとりひとりが生きる授業について

今回の視察においては、研修テーマは「ひとりひとりが生きる授業」で、サブテーマは「自己選択・自己決定につながる協働的な学び」です。その中で、教師の役割について検討を深める必要性を挙げ、子どもを中心に置く探究的(問題解決的)な学習展開において教師の適切な関りは大変難しく、「協働的な学び」によって「自分で判断して行動できる」子どもの育成に深く関わっていくことになるのかを研修していくことでした。ただ、「協働的な学び」という言葉の捉え方はさまざまであり、明確な定義はないそうです。そこで「協働的な学び」だと呼べる条件として、次の2点を満たすものとしてまとめています。

- ①探究的な学び(または問題解決学習)の中で現れるもの。
- ②多様な他者との関りを伴うもの。

安東小学校の特色ある取り組みとして、環境教育、近年環境問題が深刻化する中で、子どもたちに環境保護の重要性を理解させることは、非常に大切なことです。安東小学校では、リサイクル活動や節電運動を通じて、子どもたちにエコ活動の大切さを教えています。また、学校周辺の自然環境を活用したフィールドワークや、農業体験学習も行われており、子どもたちは実際に手を動かしながら自然とのつながりを感じることができます。これらの取り組みは、地球環境を守る意識を育てるだけでなく、子どもたちに生命の大切さや自然との共生についても考えさせる良い機会となっています。



安東小学校では、学業だけでなく、心の成長にも力を入れており、社会性を育むために、学校生活の中で多くのグループ活動が行われていて、運動会や文化祭などのイベントでは、子どもたちが協力し合いながら一つの目標に向かって努力することの大切さを学び、自己肯定感や他者への配慮を身につけることができ、また授業や休み時間には、子どもたちが互いに助け合う姿が多く見られ、小学校内のコミュニティはとても温かい雰囲気にも包まれていました。学力だけでなく、地域社会とのつながりや環境意識、協力の大切さなど、幅広い価値観を育む教育活動が行われていて、これらの取り組みは、子どもたちが未来に向かって自信を持って歩んでいける力を養うものであり、その重要な役割を果たし続けています、教育における革新と伝統をうまく融合させ、次世代に必要な力を育む取り組みの一つです。

ひとりひとりが生きる授業を視察

研修授業として行われる教室に入ります目には留まったのは、児童の机の配置であった。一般的な黒板に向かって配置するのではなく、前三列が中央で向い会い後席は黒板の方を向いている事、授業が終わってから、この席の配置について尋ねたら、子供たちが試行錯誤の末にたどり着いた形だそう。安東小学校の『個』部分が垣間見られた瞬間でした。担任のクラスごとに自由に配置できるとのことで、クラスにあった

より良い環境をつくることへの意識が伺えました。この環境で展開される4年1組の授業は、今までの常識を覆す内容で、担任の増田先生が指揮を取り、子供たちが積極的に発言しどの様な答えでも増田先生が非常に丁寧に受け答えしている、姿がとても印象的でした。各自のノート 프로젝ターに映し出して意見を交わすなど、常に「心身ともに活動している」感じが伝わり、増田先生が児童に対し主体的に、向かい積極性を植え付けるような授業は、実に活発に児童が発言させていて、発言を要求する挙手のスタイルも決まりがあり、手を挙げてじゃんけんのパーが一般的であるが、「繰り返しの発言時」には、人差し指と中指によるいわゆる V サイン・チョキで挙手をし、グーの状態の挙手は反対意見を言う時の挙手と分けられており、ここでも『個』が際立ち、安東小学校校が理想とする授業である、児童一人ひとりを集団としてではなく、個々で見取り理解してあげる、そして学びの中でその子らしく考え、想いを表出する様子を表すのと同時に、その子のもつ資質・能力や価値観が存分に発揮され、納得する素晴らしい授業であった。

最後の座談会では、増田先生も加わっていただき、お話を伺うことができ、教員の数が不足しているとのことが印象に残った。ノートの取り方も板書に移すのではなく、児童それぞれが書き方を工夫したり、感じたり想像したこと等を自由に書かせているようで、そのノートチェックにも相当な時間がかかり、更に、児童一人ひとりの理解度や考え方も、毎回授業後にその進捗を座席表シートに記入していくため、大変な時間と労力が必要で、とても担任一人での対応では厳しいと感じた。



所感

静岡市には現在83校の学校があり、教育委員会の方のお話によると、すべての学校が安東小学校様なテーマで教育を行っているわけではなく、安東小学校は「協働的な学び」としての特色であり、また別の学校は「個別最適化された学び」の特色のある学校で、「チーム担任」を特色としている学校があったり、「この教育の在り方がベスト」と一つに決めている訳では無く、その学校の置かれた状況（都市部か農村部か等々）が違うということは、そこに通う児童たちも違い、子どもの個性が違うように学校も個性があり、その個性の中でしっかりと育ていくために、どのような教育がよいのかが、永遠の課題だと話していたことも印象的でした。

このような取り組みは、学校全体でベクトルを合わせるからこそが必要不可欠であり、子どもたちへの教育は、「情熱」、「根気」、「継続」があってこそ成り立つと考えている。今回の視察で多くの事を学び得ました、安東小学校のこうした取り組みは、昭和40年代より、「個」がテーマで、その時々に合わせて形で現在まで50年以上に渡り受け継がれており、無限の追求、終わりなき探求心とも言えるでしょう。

学校全体で取り組む「思いやりの心」を育む活動は、福生市の教育にも取り入れられると感じ、一人一人が互いを尊重し合う姿勢は、安心して学べる学校づくりに欠かせない要素で有ると共に福生市が掲げる、「こどもまんなか ふっさ」に視察を通じて得た知見を、反映し教育の充実を図っていきたいと感じた。

二日間の視察研修では、研修後の限られた時間ではありましたが、「部活動の地域以降について」「安東小学校について」共に大変盛んに、意見交換が行われ、予定していた時間が足りないくらい、参加者全員が積極的に、質問を投げかけ、それに応じた回答や新たな視点が提供されたことで、議論が深まり、物事の理解がより一層進み、今回の視察を通じて、多くの貴重な知見を得ることができました。特に、取り組み方や工夫には、感銘を受け、実際の運用や現場での姿勢が非常に参考になりました。また、ご対応頂いた方々の丁寧な説明により、理論と実践を結びつけて学ぶことができた点も大きな収穫でした。これからの福生市に活かせる要素が多く、視察を通じて得た知識を積極的に活用していきたいと考えています。

最後に安東小学校から視察研修で提供された資料中からコラムを紹介いたします。

これが「自分で判断して行動する子」

一年生の生活科の学習で、子どもたちは「チューリップを球根から育て、6年生にプレゼントしたい」という思いを持ちました。「さあ、これから球根をうえ、お水をあげて育てていこう」と担任が言おうとしたとき、子どもたちがこんなことを、自然と言い出しました。「お水はどれくらいあげればいいの?」「アサガオの時はあげなさ過ぎてかれちゃったんだ。だからたっぷりあげないと」「ぼくはこども園の時に、先生から、お水のあげすぎは球根がくさってしまうといわれたよ」「どうすればいいんだろう」

その姿を、担任は見逃しませんでした。

「じゃあ、どうやって育てていくか、調べないといけないね。どうする?」すると子どもたちは、「お花の事なら、用務員の〇〇さんに聞いてみよう」「図書館でしらべたほうがいいよ」「本のことなら△△先生に聞いたらいいいじゃない?」担任は、こう言って子どもたちを活動へいざないます。「じゃあ、それぞれ自分が一番いいと思う方法で調べてみようか!」子どもたちは夢中になって、自分にとって必要な情報を集め始めました。結局、それぞれが調べた方法で水をやり、チューリップを育てる事になりました。このエピソードから、我々が目指す子どもの学びの姿が浮かび上がってきます。子どもたちが心から考えたいと思う問題を解決しようとするプロセスでは、協働は自ずと生まれます。同時にそのような学びには、自己判断・自己決定につながる場面が重なります。担任がチューリップにやる水の量を示し、その通りに育てたほうが、もしかしたらチューリップそのものはよりよく育つかもかもしれません。しかし、ここで大切なのは、子どもが自ら学び、解決する過程の中でしか伸びない資質・能力があるということです。そのような機会をいかにして作りだすかが、「自分で判断して行動する子」の育成にかかわっているはずで、私たちはこのような子どもたちの学びを引き出し、支える存在として、やるべきことを考えていく必要があるのではないのでしょうか。

